

## 2015年度立命館大学校友会 東日本大震災復興支援事業 東北応援ツアー レポート

参加者氏名 糸田川 廣志 (イトガワ ヒロシ) 立命館大学技術士会  
卒業年 1972年 (昭和47年) 卒業学部 理工学部土木工学科  
参加コース C 福島県コース

2015年11月7～8日、福島県応援に参加した。第1日目の7日は、浪江町とJヴィレッジに行った。浪江町は、原発事故で全町避難しており無人の町となっている。住居や店舗は震災直後のままで人間以外がしたい放題と聞いた。人が住まなくなって4年8ヶ月、もはや住める住居、営業できる店舗ではないと推測できる。取り壊して建て替えるのか、修繕して戻すのか、いずれにしてもその負担を誰が負うのか、大きな課題を残している。原発事故で否応なしに町から追い出されるように避難したが、帰還となって、個人や企業が負担となると大きな疑問だ！

民間会社である東京電力(株)にその力があるとは、現時点では考えられない。一方、電力は国策として施行してきているが、国の覚悟は全く見えない。全国に50以上ある原発をどう安全に収束させるのか、まるで他人事のようにである。

私は震災直後に原発事故で直感したのは、福島県民移転である。故郷を失うのは精神的に厳しいが、放射能汚染から逃れるには遠く離れる以外にないと直感した。浪江町の現状を見て、震災直後の直感を思い出した。町民は2万人を超え、全国各地に避難している。県内に約70%が避難しているが、故郷への帰還の思いを感じる。将来帰還が実現するかは不明だが、住居や店舗を元に戻せるか疑問であり、国も国民もこの現実を受け止めなければ、絆が虚しいものとなる。いずれ廃炉となる全国各地の原発の覚悟を今しなければ、震災も避難の現実も教訓として活かされない。福島、浪江町と絆を結べるのか、私達の大きな課題だ！

そこが故郷であっても、放射能汚染の危険性高い場所に帰還を進めることは技術者として絶対にできない！

次にJヴィレッジを訪問した。サッカーをはじめスポーツ界等を支えてきたトレーニング場で、素晴らしい施設が震災後は救援等の基地となっている。芝のピッチはほとんど無く、駐車場に変わっている。震災復旧が進み、再び芝のピッチが復活し、スポーツ界等を支える日々が到来することを願うばかりである。

私は中学～高校と陸上競技に夢中になったが、スポーツは平和でなければできないし、安全な場所でなければ取り組めない。

Jヴィレッジが本来の目的のために、人々が集まることを願っている！

7日の宿泊はハイアonzで、到着後に震災直後の被災とお客をどのようにして送り、無事帰宅してもらったかを話していただいた。ホテルの安全確認と残った客を安全に送ることができるかを聞き、接客仕事の辛さを痛感した。従業員が安全帰路の確認のため、2班編成でルートを実施確認し、それにしたがって、バスを運行させて客を帰路に無事着かせたことや、グランドオープンへの取り組みを聞き、復興することが自分達とともに周囲も元気づける事になるとの思いがした。その後の懇親会は、1日の疲れを癒やすよき場であった。

日本が築いてきた“おもてなし”の感覚が、危機状態で役立ったと感じたものである。

2日目は、“あかい菜園”→“アクアマリン福島”→“いわき・ら・ら・ミュウ”を経て、郡山駅にて解散となった。『あかい菜園』は、トマトハウス栽培を主とした農業法人である。日照時間の長い温暖気候を活用してのトマト栽培で、出荷は露地物が終了してからの11月～6月とのことである。大玉トマトは桃太郎が主で、これは糖度も高く美味しい！私の次男も露地物で同じ品種を主にハウス栽培している。実に美味しい！船生社長が説明用に採ったトマトが私の口に入りたいたいと言ってるようで、手を伸ばしてもらってしまった。食感もよく、実に美味しい！

土産としたトマトも、実に美味しく、自分1人で楽しんでしまった！

『アクアマリン福島』では、最初に震災時のビデオを見せていただき、津波エネルギー運動の猛威、脅威を再確認することができた。津波が何度となく押し寄せ、その後は猛威の引波となって施設を破壊し、車やコンテナ等を海に引きずり込むエネルギーを見て、自然破壊力の猛威、脅威を再確認した。津波が何度となく押し寄せる海溝型地震エネルギーは脅威だ！この津波の状況を、どう伝えるかであり、現代は映像で残っており、人の目に焼き付ける、子供達はそのエネルギーの怖さを知ることが大事と再び認識した。

ここでは新施設ができており、歴史文化や里山文化を学ぶことができるようになっている。生物多様性を創りだし、“かわうそ空間”がビオトープや里山づくりに一役かっていた。ビオトープ管理士(2級計画)の私としては、貴重なエリアを見学できた。偏西風を考えると原発の南側に位置しており、放射能汚染は少ないと考えるが、風評被害はあるようで、客数は震災前の2/3程度のものである。とりわけ子供達が少なくなっているようで、“絆”を震災時によく言っていたが、虚しさを感じる実情である。施設のあちこちで、石を使ってふとん籠などがあり、液状対策、豪雨対策、津波対策および生物多様性への工夫を感じた。

昼食はとなりの『いわき・ら・ら・みゅう』でとり、するめや貝ひもを買い、土産とした。

今回の応援は、浪江町見学の貴重な経験をすることができ、有意義なものとなった。現地を見なければ理解できないことは多く、一時訪問だったとしても、目の当たりにするものは深く印象に残り、そこから考えるべきものが真摯に湧き出てくる。我々団塊世代は、戦後の大気圏内核実験の放射能汚染の中を生き抜いてきたが、原発事故は身近で発生する放射能汚染であり、リスク管理は徹底してあるべきだ。

また技術者である私は、常に真実を語り伝え、明らかにすることに真摯に向かうことが必要である。技術者として、福島の実情を明らかにして行かねばならない。

技術者は、もっともっと現地に赴き、現地を確認して、真実を語り明らかにし、復興へ真摯に取り組まねばならないと再認識した。

## 除染物置場

